

1 単元名「パルクール広場でかっこよくまわろう～台上前転に挑戦しよう～」

2 運動の捉えと子どもの実態

(1) 回転系(台上前転)の中心的なおもしろさ

- ・日常生活で経験しないような運動を通して、腰が浮く感覚、回転する感覚、落ちる感覚など新しい動きを体感し習得すること。

(2) 子どもの実態

- ・体育の授業には積極的に参加する子どもたちがほとんどであるが数人はなかなか活動に参加することが難しい子もいる。
- ・セーフティーマットや傾斜をつけたマットなど様々なマットの上で前転をすることはほとんどの子が可能である。2 人ほど全く前転ができない子がいる。
- ・事前に行ったアンケートでは跳び箱の授業が好き・ちょっとすきと答えたのはクラスの 20 人、普通が 8 人、ちょっと嫌いが 1 人、嫌いは 0 人という結果だった。
- ・跳び箱に対して「怖い」と感じている子の中で理由を聞くと落ちることへの恐怖感が多かった。
- ・昨年度、跳び箱は横置きで開脚飛びを実施。6・7段にどんどん挑戦しようとしている子が 15 人前後。7・8 人はまったく飛ばず 4 段くらいでつまづいていた。

(3) 本単元の中心となる学習内容

本単元では、台上前転を中心に習得していく。その過程で課題となるであろうポイントをクリアしていけるような場を用意し自分の課題にあわせて場を選択しながら学習していけるようにしたい。

① 着手した後、肩より腰をあげること

腰を高くあげることで回転のエネルギーを生み出すこと。腰が高くなることで天地が逆転するため、逆さ感覚も十分に養うこと。

② 腰を高くあげたあと、後頭部をつけて回転すること

腰を高くすることで回転しやすくなることに気づき、十分な腕支持のもと通常の前転より後頭部をつけて回ったり、台上（跳び箱上）でも順次接触したりしながら回る感覚をつかむこと。

③ 細いところを落ちずに真っ直ぐまわって落ちること

両腕でバランス良く支えながら横に落ちてしまうことへの恐怖を克服、真っ直ぐ回る感覚をつかむこと

④ よりかっこいい台上前転に取り組むこと

雄大な第一空中局面からの着手や、伸膝による前転の伴った発展的な台上前転に取り組むこと。

(4) 中心的な面白さを味わうための教材化

- ・パルクールという場を設定することで、これまで固定されていた跳び箱のイメージの枠を超え、こんなことをしてみたいという目標や意欲をもちながら学習できるだろう。

- ・課題別に場を設定することで一人ひとりの技能に応じて課題解決に臨むことができ、より効率的に台上前転を習得できる。また、同じ課題をもった子が集まるため、友だちとのコミュニケーションも増える。
- ・パルクールではすべての場において決められたかたちで飛び越さなくても良いため自分だったらこの場でどんなことができそうかと工夫しながら学習に取り組めるだろう。
- ・自分で場を選択することでより自分の回転の仕方を気にするようになり友だちに見てもらえるように頼むことで友だちとのコミュニケーションも増える。

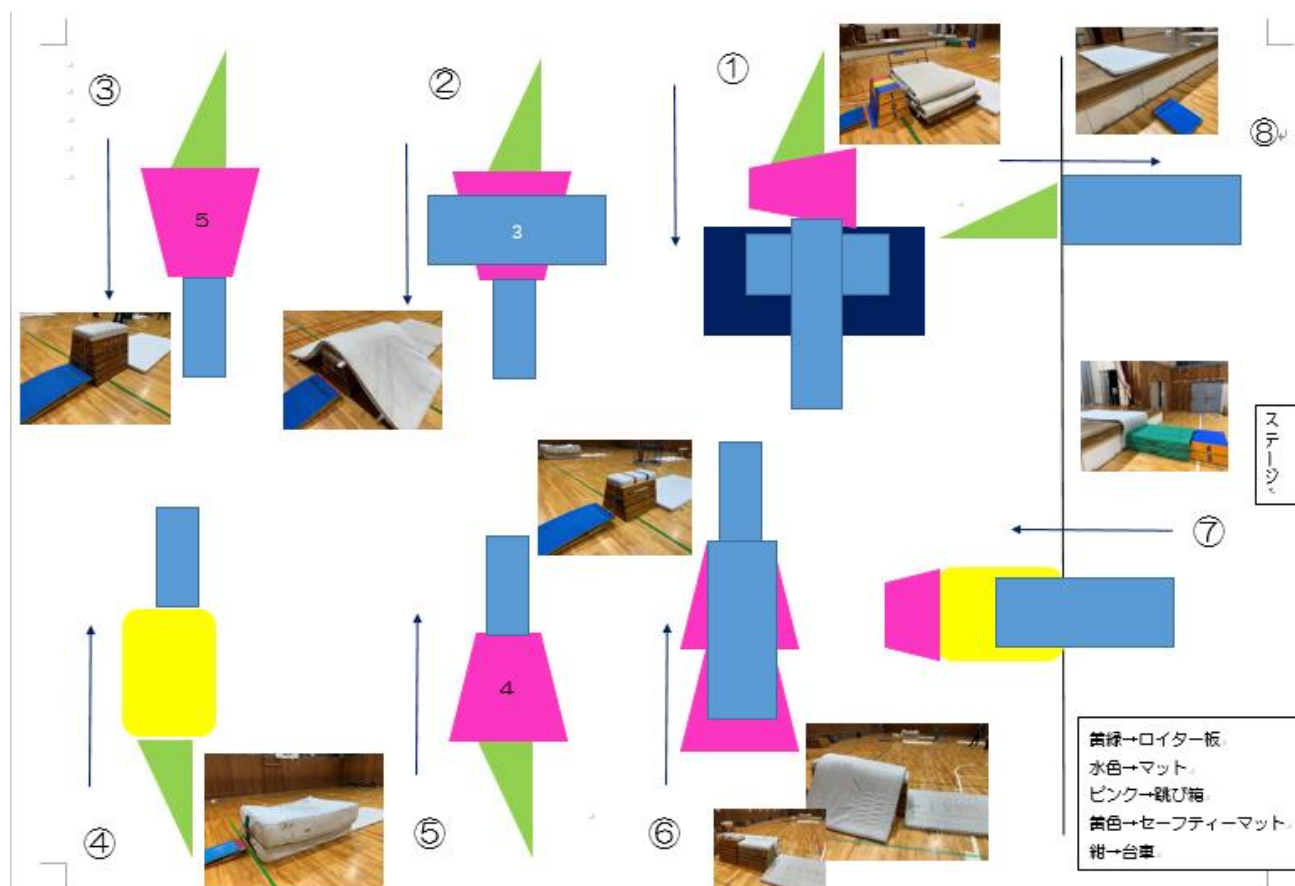
3 「パルクール」の場の工夫

(1) 用具の工夫

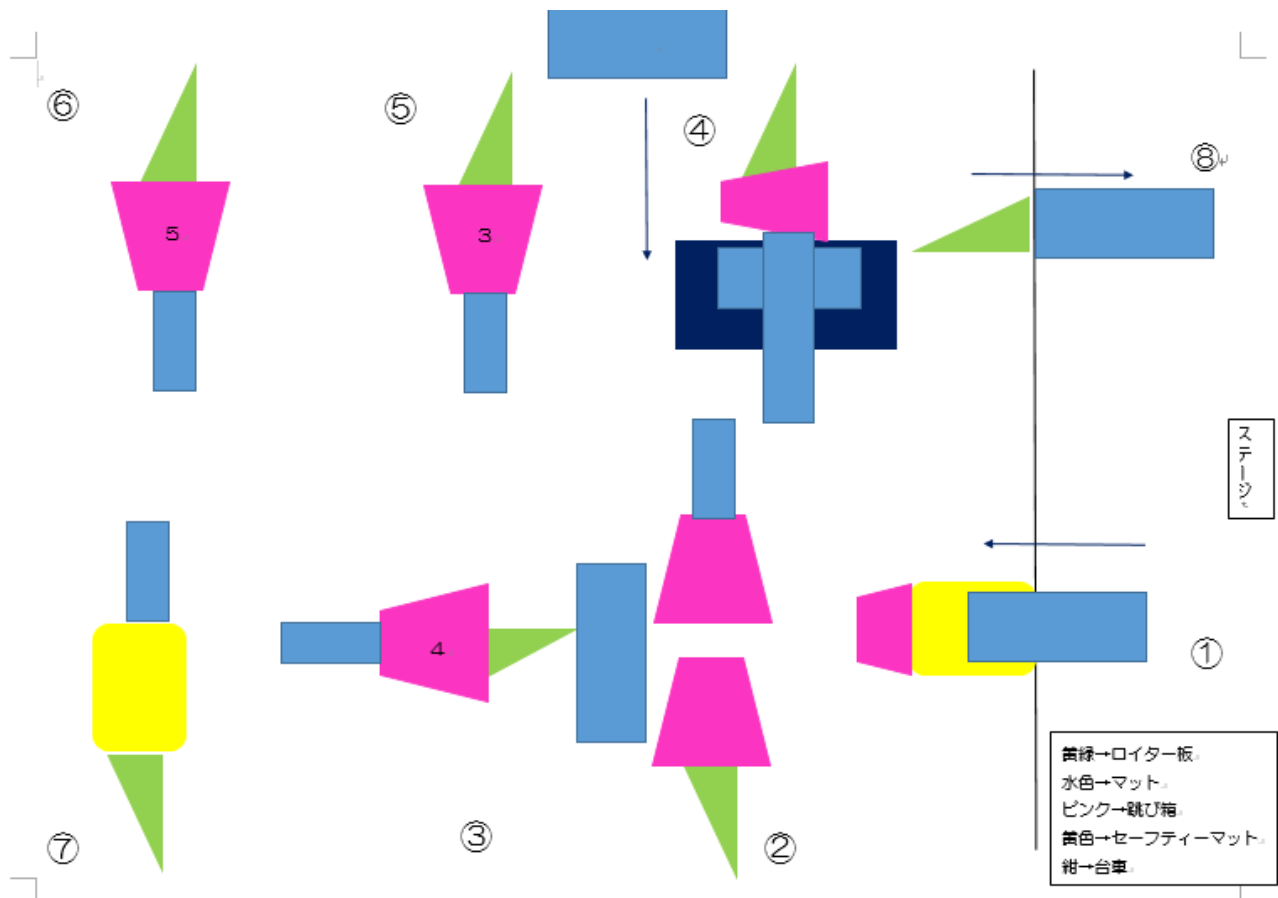
○マット 12 枚 ○跳び箱 6 台 ○ロイター板 6 台 ○セーフティーマット 2 枚

(2) 場・コートの工夫

台上前転の練習まで



パルクールの時



① 腰をあげ、腰が高い所から回る感覚をつかむ・幅広で横に落ちてしまうことのへの恐怖感軽減

② 通常の上上前転（3段、マットをかけることで横に落ちてしまうことのへの恐怖感軽減）

③ 通常の上上前転（5段）

④ 踏切から回る感覚をつかむ・台上前転の動きの習得・高さ軽減

⑤ 通常の上上前転（4段）→向きを変える

⑥ 腰をあげ、腰が高い所から回る感覚をつかむ・幅の狭いところで回る感覚になれる

→飛び箱同士の距離を離す

⑦ 落ちる感覚をつかむ

⑧ 台上前転の動きの習得・横に落ちてしまうことのへの恐怖感軽減・高さになれる

※パルクール時にはマット、飛び箱、ロイター板という逆走は禁止するが横から飛び越すのは許可する

（3）資料・学習カードの工夫

○学習カード

- ・どの場がどんな課題解決のための場であるか、動きのイメージやポイントが分かるようにする（以下図参照）。
- ・前時での活動内容や次時への課題等、確認しやすいようにし、子どもたち自身で見通しをもって追究できるようにする。

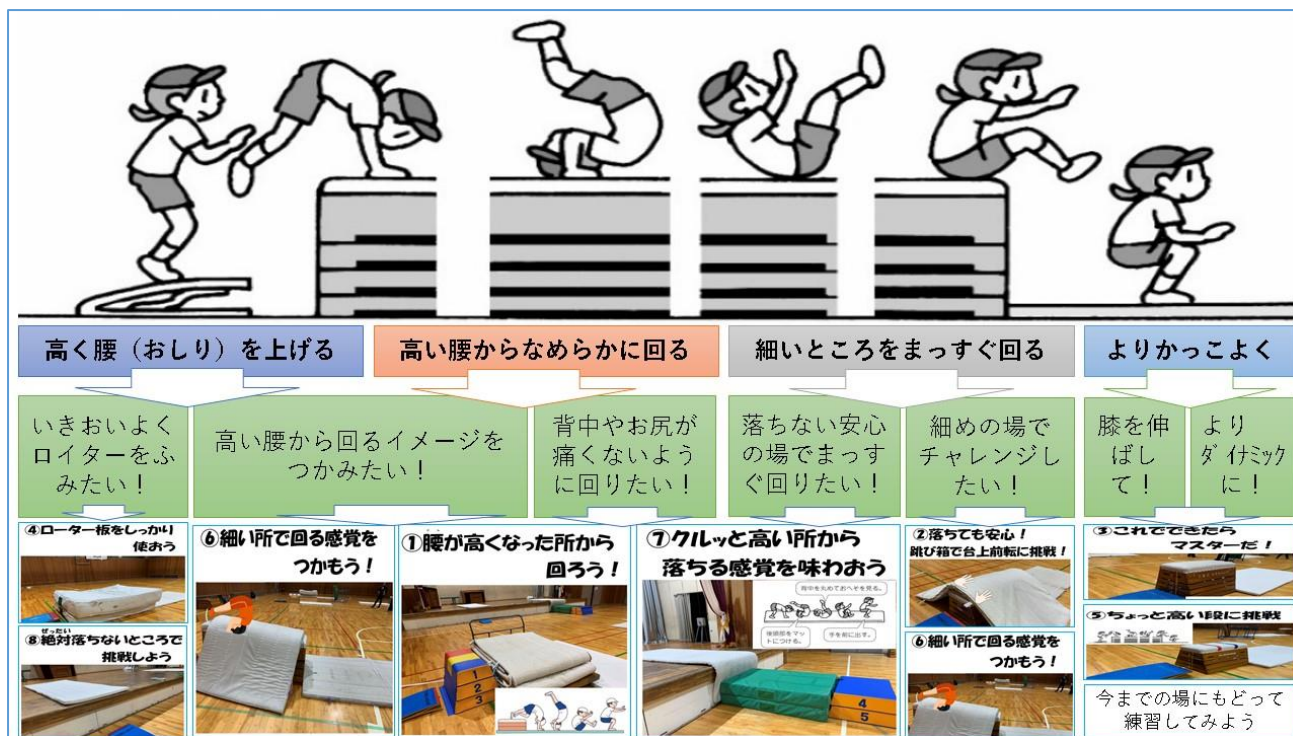


図 課題と子どもたちの困り感や願い、解決の場のつながりを明示した資料

(4) ドリル練習の工夫

○単元を通して行うドリル練習

①準備体操・ストレッチ（8班8カ所で分かれて行う）

- ・いつも通りの準備運動を行う。
- ・怪我予防のため、首や手首を念入りに行う。
- ・カエルの足うち、ゆりかご

②パルクール広場でサーキットトレーニング

- ・それぞれの着地マットで前転（②・③・④・⑤）
- ・くま歩き（⑧）
- ・うさぎとび（⑦）
- ・ロイター板での両足踏み切り（各ロイター板）
- ・開脚跳び（②・⑤）

4 子どもの動きの予想とゴールイメージ、課題の決め出し

(1) 予想される子どもの習得様相

① 単元序盤

跳び箱やマット、マットの運搬台などを組み合わせたコースを駆け抜け、跳び越していくパルクールの映像をオリエンテーションで観る中で、ワクワク感を持ち単元への期待を高めていこう。その映像の中で「跳び箱の上を前転して越えていく技＝台上前転」に出会い、この技が入ることでパルクール

クールの演技がよりかっこよく決まることを知り、台上前転を取り入れた「自分だけのパルクール」をやってみたいと思うようになるだろう。

実際にパルクールの場を作り、それぞれの場でできそうな動きを試してみる中では、開脚跳びに限らず、「横跳び」や「跳び乗り」、「跳び降り」、「跳び越し」、「またぎ越し」など様々な動きが出されるだろう。これらの動きは、「腕支持」や「両足踏切」、「ゆりかご」などと合わせて毎時間のドリル等で積み重ねていくことの大切さに気づくだろう。

初めての台上前転への挑戦では、もう一度映像や教師の試技を観て、技の構造を把握する必要があるだろう。開脚跳びと比較することで、踏切で腰を高く上げた後、回転することや着手を跳び箱の手前で行うことに気づくだろう。実際に台上前転を試してみる中では、最初からなんとなく回れる子もいるだろうが、怖くて腰が高く上げられなかったり、まっすぐに回れず跳び箱から落ちそうになったりする子もいるだろう。そうした姿も想定し、4段程度の跳び箱で高さを調整されていることにより、どの子も挑戦しやすくなるだろう。

② 単元中盤

初めての台上前転への挑戦で出された課題を全体で共有し、それぞれの課題に沿った練習の場があることを知ること、目標をもって前向きに練習を続けるだろう。例えば、「腰が高く上がらない」といった課題については、④や⑧の場を使うことでロイター板の反動を使って腰を高く浮かせたり、腰が肩より高くなる逆さ感覚に慣れたりすることができるだろう。また、「高い腰の位置から回り始められない」といった課題については、①や⑥の場を使うことで腰が高い状態から頭頂部～後頭部をつけて回る感覚をつかむことができるだろう。

全体学習で、それぞれの場の使い方をひと通り理解した後は、自分の課題に沿った場を選択して繰り返し台上前転の練習に取り組むだろう。それぞれの場に動きのポイントやコツを掲示された場で、同じ場を選択した友だちと動きを見合ったり出来栄を伝え合ったりするようになるだろう。また、自分の動きを確認できる映像設備を用意しておくことで自分の動きを振り返る姿も見られるだろう。

③ 単元終盤

パルクール大会に向けて、①から⑧までの場をどんな順番で周り、それぞれの場でどんな動きを行うかを考え、台上前転を取り入れた「自分だけのパルクール」を構想するだろう。これまでの追究を通して、台上前転ができるようになった子は、②③⑤の場でより高い段数の跳び箱を使ったり、少し離れた位置から強く踏み切ったりしてよりかっこいい（大きな）台上前転を目指すようになるだろう。自分の課題にまだ少し不安の残る子は、課題となる部分を補ってくれる場を選択し、今もてる力でできる台上前転を取り入れようとするだろう。それぞれの考えた「自分だけのパルクール」を発表し合うことで、動きのよさや技の高まりをお互いに認め合えるパルクール大会となるだろう。

(2) ゴールイメージ

かっこいい台上前転が決まる「自分だけのパルクール」をつくろう！

(3) ゴールイメージに向けた課題のきめ出し

①本質的な課題

かっこいい台上前転…高く腰（おしり）を上げ、その勢いを使って細い跳び箱上を回り切る

②予想される下位課題

○パルクールに関わって

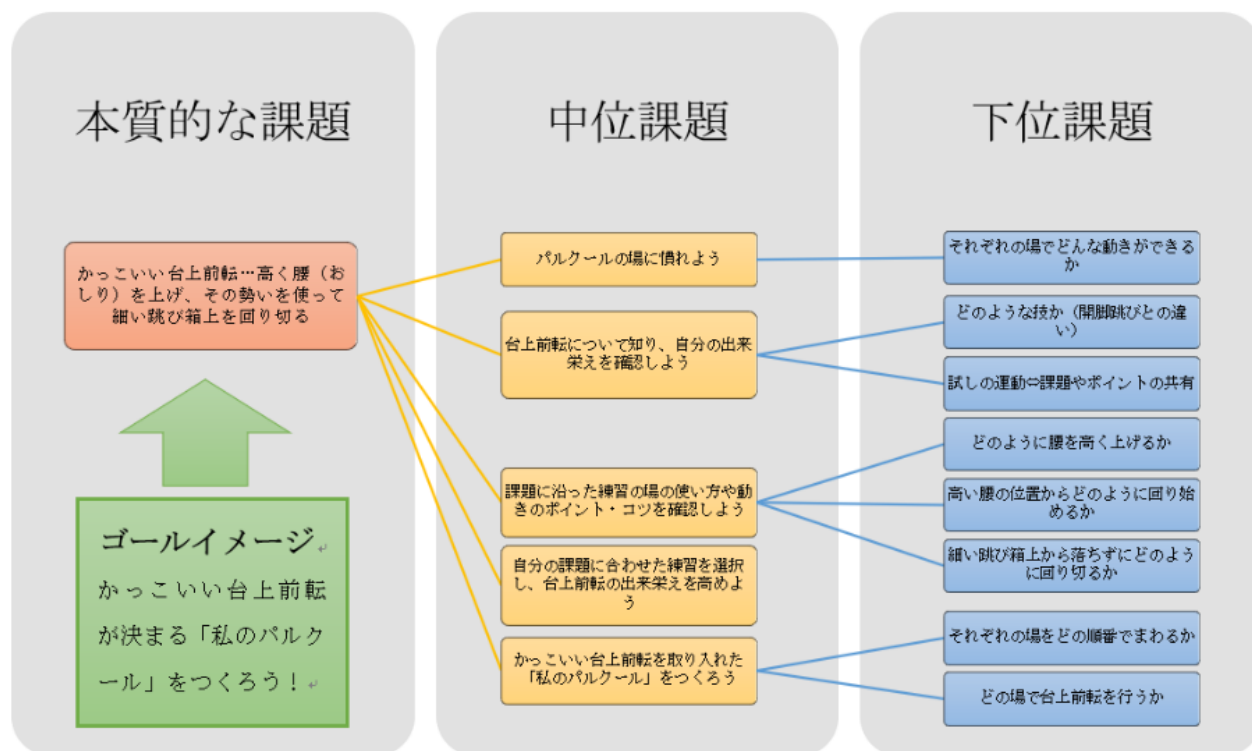
- ・それぞれの場でどんな動きができるか ・それぞれの場をどの順番でまわるか
- ・どの場で台上前転を行うか

○台上前転に関わって

- ・どのような技か（開脚跳びとの違い）
- ・両足でロイター板を力強く踏み切ること ・着手を跳び箱の手前で行うこと
- ・着手時に腰を高く上げること ・頭頂部～後頭部にかけて頭をつき回転すること
- ・両腕で支えながら跳び箱上をなめらかにまっすぐ回転すること
- ・怖がらずに勢いを止めず回転すること
- ・背中から落ちず足から着地すること

③中位課題

- ・パルクールの場に慣れよう
- ・台上前転について知り、自分の出来栄を確認しよう
- ・課題に沿った練習の場の使い方や動きのポイント・コツを確認しよう
- ・自分の課題に合わせた練習を選択し、台上前転の出来栄を高めよう
- ・カッコいい台上前転を取り入れた「自分だけのパルクール」をつくろう



④単元序盤に考えさせたい学習内容

○パルクールの場に慣れよう

- ・協力して場を準備しよう！～どうしたら早く場を設定できるかな？～
- ・パルクールの場でできる動きを試してみよう
→それぞれの場でできる基礎運動や感覚運動を確認し実際に試してみよう

→ロイター板の使い方や前転の行い方を復習しよう

○台上前転について知り、自分の出来栄を確認しよう

→開脚跳びとの違いについて、着手の位置や踏切の仕方に着目して比べよう

→実際に跳び方を試してみてどんなところが難しいか確認しよう

⑤単元中盤に考えさせたい学習内容

○課題に沿った練習の場の使い方や動きのポイント・コツを確認しよう

・どのように腰を高く上げるか

→ロイターの使い方

→腰と頭の位置と腕支持

→逆位の感覚

・高い腰の位置からどのように回り始めるか

→腰の高いところで着手⇒頭頂部～後頭部へ頭をつけて回る感覚

→腕支持からの順次接触の感覚

・細い跳び箱上から落ちずにどのように回り切るか

→幅の広い所や落ちても安心な場から狭い幅で回転することに慣れる

→勢いを殺さずに回り切ること

→両腕のバランスよい支持

○自分の課題に合わせた練習を選択し、台上前転の出来栄を高めよう

・課題に合わせた練習の場を選択し、動きのポイントやコツを確認していこう

・同じ場で練習する友だちと動きを見合ったり出来栄を伝え合ったりしよう

・自分の動きを動画で確認しよう

⑤ 単元終盤に考えさせたい学習内容

○かっこいい台上前転を取り入れた「自分だけのパルクール」をつくろう

・よりかっこいい（大きな）台上前転を目指そう

・どの場で台上前転を入れるか決めよう

・どの場をどの順番でどの動きで行うか考えて試そう

5 単元の目標

（1）単元の目標

① 知識・技能

回転系の基本的な技の行い方を知るとともにその技を身につけることができるようにする。

② 思考・判断・表現

自己の能力に適した課題を見つけ、技ができるようになるための活動を工夫するとともに、考えたことを友だちに伝えることができるようにする。

③ 主体的に学習に取り組む態度

運動に進んで取り組み、きまりを守り誰とでも仲よく運動をしたり、友だちの考えを認めたり、場や器械・器具の安全に気をつけたりできるようにする。

(2) 評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
ア 技のポイントを理解している。 イ 腰を高く上げ、その勢いで後頭部をつけて回りきる台上前転ができる。	ウ 自己の実態にあった課題を見つけ、その課題解決のための場や練習方法を選んでいる。 エ 動きのポイントやコツなど考えたことを友だちに伝えたり学習ガードに書いたりしている。	オ 道具の準備や片づけを協力して素早く行ったり、道具の安全を確かめたりしようとしている。 カ 台上前転の習得に向けて、粘り強く取り組もうとしている。 キ 自分の課題をふり返り、見通しを持ち工夫して活動しようとしている。

6 学習の構想

(1) 時間計画

はじめ		なか			まとめ	
1	2	3	4	5	6	7
オリエンテーション	ドリルの確認	場の準備				
		準備運動・パルクール広場でサーキットトレーニング				
	本時の課題確認					
・パルクールについて知ろう ・それぞれの場の使い方を知ろう ・場になれよう	・台上前転について知ろう ・台上前転と開脚跳びの違いを見つけよう ・課題の確認	課題①腰を高く上げる感覚になれよう 課題②高い位置から後頭部をつけて回ろう 課題③細い所を真っ直ぐ回れるようになろう			自分の課題に挑戦し、台上前転の出来栄を高めよう	
		パルクールに挑戦しよう			かっこいい台上前転をとりいれた自分だけのパルクールをつくろう	
片づけ		ふり返り・片づけ				

(2) 単元展開

段階	学習活動	*指導 ◆評価	・子どもたちの意識
はじめ 第1	【学習活動とオリエンテーションにおける教授行為】 ・場の準備の仕方・準備(班ごと)。 ・パルクールとは何かを知る。 ・ゴールイメージ(目標)の設定。 ・台上前転とはどんなものかを確認する。(映像) ・授業の進め方の確認	*学習をしていく上での注意事項(安全面)と場の設定の仕方を伝える。 ◆オ	・パルクールってなんかかっこいいな。 ・やってみたいな。 ・台上前転やってみたい。 ・ちょっとこわいな。

・ 2 時	・ドリル練習についての確認、体験 【単元のゴールイメージ】 かっこいい台上前転が決まる「自分だけのパルクール」をつくろう！ 【中位課題】パルクールの場になれよう。 台上前転について知り、自分の出来栄を確認しよう。 ・様々な場の跳び箱に挑戦し試してみる。 提示していく（予想される）下位課題 i それぞれの場を試してみよう。 ii 台上前転について知り、どうしたら台上前転ができるようになるか考えよう。 ・次回以降の課題を考え、全体共有する。 ・学習課題の洗い出し 課題①腰を高く上げる感覚になれよう 課題②高い位置から後頭部をつけて回ろう 課題③細い所を真っ直ぐ回れるようになろう	＊実際に試していく中で、場を回って補助をする。 ・ステージのは前やったことがあるからできそう。 ・跳び箱の上で挑戦したい。 ・セーフティーマットでなら回れるけどステージだとうまくいかない。 ・何でまわれないんだろう。 ＊どの場が難しかったかではなく、どんな体の動きが難しかったかを考えさせる。 ◆ア
なか 第 3 5 時	・時間計画の提示 ・大まかな単元展開の共有 ・台上前転の習得 【中位課題】課題に沿った練習の場の使い方や動きのポイント・コツを確認しよう 自分の課題にあわせた練習を選択し、台上前転の出来栄を高めよう。 【学習の進め方】 ○用具の準備、ストレッチ、ドリル ○学習課題の確認（全体） 課題①腰を高く上げる感覚になれよう 課題②高い位置から後頭部をつけて回ろう 課題③細い所を真っ直ぐ回れるようになろう ○その日の課題を中心に様々な場で練習する ○その日の課題を取り入れながらパルクールする	＊今日の課題を明確にする。（写真や学習カード） ＊子どもたちのつぶやきを共有する。 ・今日のめあては〇〇だから〇番の場所で試してみよう。 ・両足でロイター板をしっかり踏むと高く跳べて高く回れそうだな。 ・おへそを見て丸まって回ると背中が痛くならずできそうだな。 ・両手をぐっと押さえてやるとうまく回れたよ。 ＊本時の課題のふり返りで次の課題も明確にする。全体では具体的な場を使って考えたり共有したりする。 ◆イエカ

ま と め 第 6 ・ 7 時	【中位課題】台上前転を取り入れた自分だけのパルクールをつくりあげよう	
	・台上前転に対する自分の課題を練習する ・自分だけの地図を作ろう ・自分だけのパルクールをしよう 【学習の進め方】 ○用具の準備、ストレッチ、ドリル ○学習課題の確認（全体） ○自己課題の追究 ○パルクール	・今日は細い所で回ることを完ペキにしたいな。 ・5段でできるようになったから大きな台上前転を試してみたいな。 ・カッコよく跳びたいな。 ・パルクールの時、どこで台上前転をやるかな。 ＊自分の課題に対してどこの場を使えば良いか考えさせる。 ＊危険な行為にならないように注意する。 ◆ウキ
	○単元のまとめをする →自分の良かった点や変化を振り返る →単元の感想を書く	＊どんな体の動きができるようになったかを振り返られるようにする。 ＊友だちに教えてもらったこと、友だちと一緒にできるようになったことを発表させる。 ◆エ

7 本時案

(1) 主眼

台上前転の課題に挑戦してきた子どもたちが、動きのポイントを確認し、示範演技を見ながら細い所を落ちずに真っ直ぐ回るためにはどうすれば良いか考える場面で、落下への恐怖感を軽減するための専用の場で練習することを通して、腰を高く上げ、その勢いで後頭部をつけて回りきることができる台上前転ができるようになる。

(2) 本時の位置 7時間中第5時

前時 腰を高くした位置から後頭部をつけて回る感覚をつかんだ。

次時 自分の課題に挑戦し、カッコいい台上前転の入ったパルクールに取り組む。

＊3つの課題は子どもたちの状況に応じて順番を入れ替える。

(3) 指導上の留意点

- ・友だちとぶつかることがないように声を掛け合ったり、周囲の確認をしたりすることを伝える。
- ・子どもたちが安全に運動することができるように、場が適切に設置されたり、整理されたりしているか確認する。
- ・子どもたち同士で場を元の位置に直したり、動かないように支えたりできるように伝える。

(4) 展開

階	学習活動	予想される子どもの反応	○指導 ・ 評価	時間
は じ め	◇道具の準備 ・ 班ごとに行う。 ◇ストレッチ・ドリル ・ ストレッチ ・ サーキットトレーニング ◇本時の課題を全体で確認する。 ・ 細いところを落ちずに回 るためにはどんなことが 大切かを考える。	・ 協力して素早く準備し よう。 ・ 怪我をしないようにしっ かりストレッチしよう。 ・ 前転のときに真っ直ぐ回 れるように意識しよう。	○素早く準備できるように 声がけする。 ○たくさん練習ができるよ うに、分散してサーキッ トトレーニングを行う。	5 6 5
		【めあて】細いところを落ちずに回れるようになろう！		
		・ 腰を高く上げて後頭部を つければ勢いがついて回 れそうだ。 ・ 両手でしっかり跳び箱を つかめばできそうだ。 ・ 背骨がついているか確認 したいな。	○子どもと同じ学習カード の拡大版を掲示してお く。 ○示範演技を見ながらどこ がポイントになりそうか 考えさせる。	
な か	◇課題に対する練習 主に②⑥⑦	・ 早くやりたいな。 ・ ⑥はまだ少し怖いから⑦ 番でたくさん練習したい な。 ・ もうできるから、もっと かっこよくなるためにど うすればいいか考えたい な。	○場を回って子どもの補助 をする。 ○できた際や、技を見た際 によかった動きの姿を伝 えるとともにどんなこと を意識していたかコツを 尋ねる。	13
	◇本時の課題に対するふり 返し ・ ふり返しカード ・ 全体共有	・ 最後までおへそを見るこ とを意識したらできた よ。 ・ まっすぐ回するには両手で ぐっと支えることがコツ だったよ。 ・ まだちょっと難しいから 次も課題にしたいな。	○どんなコツを意識したか 詳しく尋ねたり、全体 の中で共有したりする。 ○第3時からの課題を整理 し、次時への見通しをも たせる。	4
	◇パルクールに挑戦 ・ 30秒×8クール（休憩 含む）1人2回	・ どこで台上前転をしよう かな。 ・ 今度は全部成功させるぞ	腰を高く上げ、その勢い で後頭部をつけて回りき ることができたか。 【観察・学習カード】	7
お わ り	◇全体でのふり返し	・ 台上前転ができるよう になってうれしかった。 ・ パルクールで○番のと ころがおもしろかった。		2
	◇片づけ		○安全に行えるように声が けする。	3

(5) 話題にしていadakいたいこと（本時の子どもたちの姿から）

- 本単元での教材化（場）の効果について子どもの様子から
 - ・パルクールを取り入れたこと
 - ・台上前転の下位教材としてのパルクールの場
- ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為（学習課題の把握、ドリルや練習での内部感覚を引き出す言葉かけ、全体でのふり返り等）について子どもの様子から

令和 6 年度 上伊那保健体育学習指導研究会

I. 授業者の記録(単元記録)

第0時「跳び箱の準備の仕方を覚えよう」

単元に本格的に入っていく前に場の作り方について確認した。自分たちの現状を知り、どうしたら活動する時間を増やしていけるかを考え、タイムを計ることにした。班の中で自分の役割を決め、協力し合ってより素早く準備できるようにしたいという意欲につながった。

第1時「パルクールと台上前転について知ろう」

オリエンテーションでは、パルクールの映像を見ながらこれから自分たちがどんなことに挑戦していくのかを確認した。映像を前のめりになって見る姿や、「サスケ!?!」、「パルクールじゃん!!」といった声も上がり興味津々な様子だった。また、自然と手拍子がおこるなど自分たちもやってみたいという意欲をもたせることができた。その中でも、台上前転という新しい技に注目させ、台上前転が入っているパルクールをやってみたいというゴールイメージを据えた。

第2時「台上前転と開脚跳びの違いについて知り、台上前転の課題を見つけよう」

2時では台上前転と開脚跳びの違いについて確認した。そのことを踏まえ、実際に様々な場で挑戦してみると、「横に落ちてしまう」、「後ろを見ていない」、「ロイター板をしっかりと踏んでおしりの位置を高くしたい」という課題が出てきた。やってみるとなかなか難しいと感じている子どもが多かった。しかし、様々な場があることで、自分でできそうな場をえらんで意欲的に取り組んでいる姿が見られた。

第3時「ロイター板をしっかりと踏んで、おしりの位置を高くしよう」

おしりが高い位置から回ることを意識してできるよう、主に①番と⑥番の練習を推奨した。しかし、おしりを上げてがんばろうとしている姿は多く見られたが、場にこだわって練習する子は少なかった。練習の途中では、ロイター板の踏み方、踏んだときの音に注目させるようにした。子どもの振り返りからは、多くの子がロイター板を「ドン」と強く踏めたという言葉を書いていた。また、高くジャンプすることでおしりを上げられたという子もいた。3時間目を終え、「もっと高くおしりをあげたい」、「後ろが見えるようにしたい」という課題が出された。

第4時「後ろを見られるように頭の後ろをつけるようにしよう」

4時間目では後頭部をつけることを意識して取り組んだ。後頭部が上手につけている子と、まだ苦手だという子の違いを見つけ、脳天ではなく後頭部をつけたいという意識が高まった。また、後頭部をつけるためにはおへそを見ることが重要だと気がついた子どもたちは、ダンゴムシをキーワードに活動していた。さらに前時からの課題であるジャンプの所では、体を「へ」の字ではだめで、「く」の字にした方が良いと気がつき活動していた。子どもの振り返りからは、「おへそを見ることが意識できた」、「頭の後ろをつけることを意識したら回れるようになった」というものが多かった。また、次回の課題として、「もっと確実に後頭部をつけたい」、「真っ直ぐ回れるようになりたい」などがあげられた。この4時間目で台上前転が初めてできたという子が一番多かった。

第5時(本時)「手をしっかりとついて真っ直ぐ回れるようになろう」

5時間目では今までの課題を含め、しっかりと手をついて真っ直ぐ回れることを意識して活動した。成功映像をスローで再生することで、どのくらいまで手をついているのかを客観視することができた。また、失敗映像と比較することで手をつくことの重要性に気がついた。練習していく中で、子どもの感覚から手を「ぎゅ〜と」つくことを全体で共有した。その結果、子どもたちの振り返りでは、8割の子が「ぎゅ〜と」という言葉をあげていた。音による感覚を共有することの大切さを学ぶことができた。次回への課題では、今までのことを振り返り、自分の課題を持つことができていた。

第6時「自分の課題を見つけて台上前転をより上手にしよう」

自分の課題に沿った練習場所がどこかを確認し、さらに台上前転をカッコよくできるように練習した。その後、自分がパルクールでどのくらいの場を回れるかを考えて、どこで台上前転を入れるか、どの順番で回るかを考えた。最初は4カ所回れる子が数人しかいなかったが、全体共有をしていく中で、ほとんどの子が4カ所以上回れるようになった。子どもたちの感想では、自分なりの回り方が書かれており、とても意欲的な姿が書かれていた。

第7時「自分だけのパルクールを楽しもう」

パルクールをメインに活動した。パルクールを何回も練習して、自分の回りやすい順番、台上前転の場を見つけた。何回も取り組む事で、自分のやりやすい方法を見つけた。最後に1回本番として行った。本番となると周りも一生懸命盛り上げる姿があった。子どもたちの感想からは、自分も盛り上がる事ができた、跳ぶときに何をすればいいか分かった、①と⑥で工夫したらできたから工夫を大事にしたい、最後は絶対無理だと思っていた5段も跳べるようになった、いろんな場があって楽しかった等が書かれていた。

単元全体を振り返って

○パルクールを取り入れたことについて

パルクールを取り入れたことで、「やってみたい」という気持ちを強くもたせることができた。また、台上前転を習得してしまった子どもたちも飽きることなく、パルクールでの技を考えたり、何回も挑戦したりと楽しみながら活動することができた。しかし、子どもたちからは、様々な場で台上前転を完ペきにしたいという思いも生まれ、パルクールの時間になってもずっと台上前転をしている子もいて、パルクールでの技を増やすことができなかった。

○場作りについて

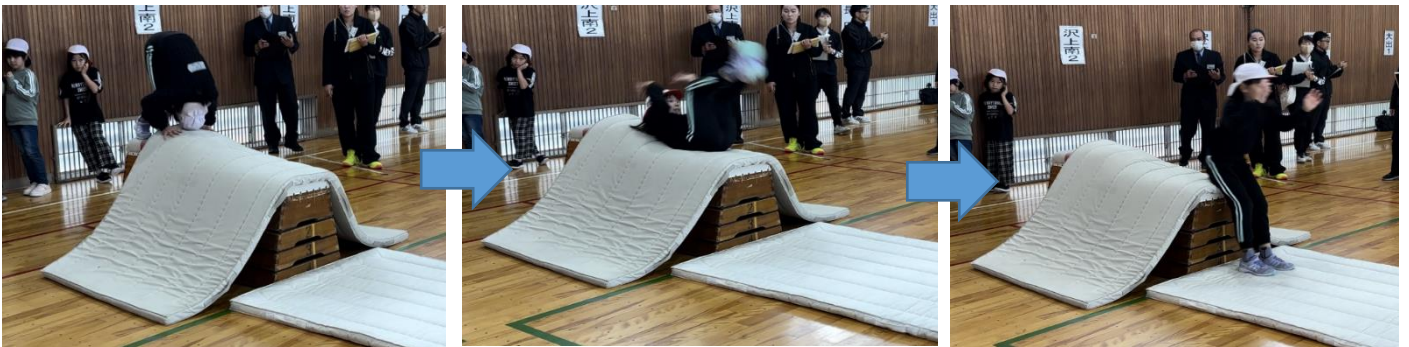
様々な場があることで、子どもたちが恐怖感やイヤイヤ感をもつことなく自分で選択して活動することができた。また、懸念されていた場作りにかかる時間は、工夫次第でクリアでき、3分程度で行うことができた。特に⑥番の場はすごく効果的であったように感じる。

1. 子どもの様子(追究の様子や動きの様相の変化)

(1)準備～課題把握

スムーズな準備から始まり、元気よく体操する姿が印象的だった。

サーキットでは、成功していない場で一度チャレンジした後、自分の課題にあった場を選んで練習をしていた。「腰を高く上げる感覚」をつかめていない様子であったが、細いところで前転をすることへの恐怖心等はなさそうであった。跳び箱運動に苦手意識をもつ一方で、友だちからアドバイスをもらいながら、一生懸命練習に取り組んでいた。

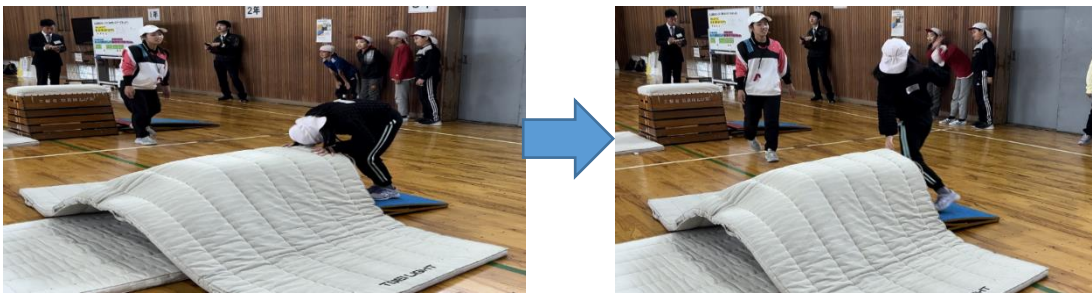


(2)追究(練習、パルクール)

サーキットの時と同様、腰を高く上げる感覚がつかめず、段差のある練習の場（下の写真）は避け、高い位置から練習できる場（上の写真）で繰り返し練習をしていた。

友だちに誘われ、段差のある練習の場（下の写真）にチャレンジしたが、腰が高く上らず諦めかけていた。そこに先生が補助に入ったことで、腰を高く上げる感覚をつかむことができた。その後は、補助なしで台上前転をすることができた。

全体指導にて、手で台を押す感覚として「ギュー」という擬音語がポイントとなることを確認し、練習を再開した。Nさんは、友だちと手のつき方や「ギュー」という言葉を繰り返し確認していたが、段差のある練習の場（下の写真）で再び台上前転を成功させることはできなかった。





(3)ふり返り・授業後インタビュー・学習カードの記述

個人で学習カードに以下のように記入していた。

「手をしっかりついて、頭の後をしっかりつくように意識した」

「怖がらずにきれいに前転したい」

2. 子どもの様子からの考察

(1)本単元での教材化(手立て)の効果について(子どもの様子から)

自身の課題を把握し、必要な場を自分で選択する姿から、多くの練習の場を設置したことは、子どもたちの学びを深める手立てとなっていた。

また、多くの練習の場を設置したことが、子ども同士でアドバイスをし合うきっかけとなり、学びをより深めていた。

(2)ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為について(子どもの姿から)

授業中盤で全体共有をした、手で台を押す感覚(「キュー」という擬音語)は、多くの児童にとって有効であった。

しかし、段差のある練習の場で初めて台上前転ができたNさんにとっては、マイナスに働いてしまったように見えた。補助によって腰を高く持ち上げる感覚をつかみ始めたNさんにとっては、どのタイミングで台を押せばよいのかがわからなかったのだろう。台を「キュー」と押すことに意識がいきってしまうあまり、着手した瞬間に手で台を押してしまい、再び腰が高く持ち上がらなくなってしまった。

(3)器械運動・跳び箱運動における、運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

本時の子どもたちの様子から、自身の技能向上に熱中する姿、友だちにアドバイスをしたり、アドバイスを求めたりする姿、成功したことを友だちと一緒に喜ぶ姿がたくさん見られた。これらの姿は、外的なポイントや自身の課題をしっかりと理解したうえで、練習の場や方法を選択し、試行錯誤した結果生まれたものではないだろうか。

1. 子どもの様子（追及の様子や動きの様相の変化）

（1）準備～課題把握

用具の準備や準備体操は、班の子と協力しながら行っていた。補強運動も一通りできていた。

（2）追究（練習・パルクール）

<練習>

①→⑧→⑦→②→①→⑧→①→② の順で行う。初めは順調だったが、2回目の⑧の時に手をぶつけたのか、左手首？を気にする様子あり。以降、ずっと手を気にしていた。2回目の②の時は、並んでいるものの、順番が来ても跳ぶ様子がなく、友だちに先を譲っていた。ここで大鷹先生からの補足説明があり、話は聞いていた。その後、③で跳んで台上前転ができていた。周りの子も「やったー」という感じで喜ぶ様子あり。跳んだ後はマットの位置を直すなど、気を取り戻したように見えたが、続けて並んだ③で再び跳ぼうとしたところ、助走に勢いがありすぎて踏切がうまく合わず、跳べずに終わる。その後は、③の列にはいるものの、並んでいるだけで終わっている。

<パルクール>

2回とも挑戦できず、少し離れて見て終わっている。泣いていたのか、ハンカチで拭く様子があった。

（3）振り返り・片付け

カードは、右手で書いていた。恐らく左利き？痛めたところを気にしている様子。記入内容は確認できなかった。片付けは、積極的な動きではないが、跳び箱を1回運んでいた。

2. 子どもの様子からの考察

（1）本単元での教材化（手立て）の効果について子どもの様子から&（2）ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為について子どもの様子から

パルクールという場の設定があることで、苦手感のある子でも、目標や意欲を持つことに取り組みやすくなっているところはあったように感じました。全体としての雰囲気はとても良かったし、パルクールの場面でも、台上前転ができていなくても楽しんで発表している姿が多かったと思います。また、練習の場の工夫が整理されていて、自ら学習を調整して取り組むことに繋がっていたと思います。

一方、単元の終末にかかる時期にしては、実際の跳び箱だけの場での練習に取り組む子が少ないようにも思いました。教師の働きかけであったり、場面の設定で、もう少し実際の跳び箱だけの場挑戦するようにすると、跳び箱だけでできるようになる子が増えるのではと思いました。（残りの2時間がどうなったのか分からない中ですが。）

（3）器械運動跳び箱運動における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

K児を集中して見ていたため、他の児童の細かい様相が終えておらず、漠然とした印象になってしまいますが、器械運動跳び箱運動における運動の楽しみ方として、跳び箱を使いながら自由に動きを選択し、回ったり、跳んだりする姿から、跳び箱運動の楽しみ方の新たな側面が見えた気がしました。とにかく、パルクールを楽しんでいる姿が印象的でした。

1. 子どもの様子（追究の様子や動きの様相の変化）

（1）準備～課題把握

練習の場④の準備で、セーフティーマットをてきぱきと運び、運び終わるとその場に座って待つ。

準備体操では教師の笛に合わせてリズムカルにジャンプする。「ゆりかご」では、しゃがんだ状態からマットに背中をつく。首の後ろがついたかつかないかのところで、揺り戻す。順次接触はそれほど滑らかではない。「かえるの足打ち」では、腰はあまり高くあげず1回足打ち。

ウォーミングアップのサーキットでは、台上前転を5回行う。練習の場⑥で右側に落ちる。腕支持が弱かったか。

課題把握の場面では「まっすぐに回れるために役立ちそうな場所はどこだろう」という教師の発問に、子どもたちから「②③⑤⑥」といった意見が出される。「まっすぐ回れるためにはどうすればいいのか」という発問には「手をまっすぐにつく」「おへそを見る」といった意見が出される。

動画を見ての確認では、「(回る時)どこ見てる?」→「足」「つま先」、「いつまで見てる?」→「転がるまで」「ゆりかごみたい(に転がってる)」といった意見が出される。手のつき方に関しては、「いつまでついてる?」→「肩がつくまで(手をついてる)」といったことを教師が押さえる。まっすぐ回れなかった動画を見ての確認では、「どうして落ちたと思う?」→「まっすぐに手をついてなかった」「手を早くはなしちゃった」といった意見が出される。本児のつぶやきはなかったが、ホワイトボードや動画を注目して見ていた。

（2）追究

【練習の場②】跳び箱3段の上にマット

- 1、2回目 高さが低いことで着地姿勢をとるまでもなく、ドンと音を立てて足から落ちる。
- 3回目 回る時に足先を見て、ややゆっくりと回る。

【練習の場③】跳び箱5段 → 【練習の場②】跳び箱3段

③で2回、②で1回台上前転を行う。まっすぐ回れてはいるが、着地はドンといった感じ。

【練習の場④】セーフティーマット

③と②が込み合ってきたせいか④へ行き、1回台上前転を行う。

中間の場面で友だちの試技を全員で見合う。

T「○○さん、上手に回れてるんだけど、手をどんな風についてるかな?」→C「まっすぐについてる」T「○○さん、どんな感じでついてる?」→C「…」

T「もう1回やってみてくれる?」 もう一度試技を見合う。

T「○○さん、どんな感じでついてる?」→C「ぎゅー、かな」

【練習の場③】跳び箱5段

6回台上前転を行う。手のつき方を意識し、背中がつくまで手をついている時もあった。それにより着地の音がストンといった感じに変わる。回転も最初よりゆっくりとなる。

（3）ふり返り

学習カードに以下のように書く。

「もっとがんばってみたいこと、ためしてみたいこと」→「手をぐうっとしてがんばりたいです」

「工夫したこと」→「手をよこについてくふうできた」

2 子どもの様子からの考察

(1) 本単元での教材化(手立て)の効果について

本時においてYさんは、準備場面で5回、追究場面で13回、パルクールの場面で6回の合計24回台上前転を行っている。台上前転の段階別に設定した練習の場が、「恐怖心を軽減する」「段階別に反復練習できる」といった理由で、Yさんにとって台上前転を行いやすい場になっていたためと考えられる。また、最後のパルクールの場面では、各練習の場同士の行き来がスムーズになるよう配置を調整したり、音楽を流したりしたことで、みんなの前でかっこよく台上前転を決めたいといった意欲につながったと考えられる。パルクールでかっこよく台上前転を決めるために、追究場面では教師の発問や友だちの意見に真剣に耳を傾け、黙々と練習に取り組むYさんの姿が見られ、本単元におけるゴールイメージがYさんにはよく浸透していたと考えられる。

(2) ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為について

本単元では、台上前転の動きのポイントに関わって以下の3つの課題を設定した。

- 課題①腰を高く上げる感覚になれよう
課題②高い位置から後頭部をつけて回ろう
課題③細い所を真っすぐ回ようになるよう

それぞれの課題を追究する際には、課題の達成イメージをイラストや映像、子どもたちの言葉で共有し、課題の達成に適した練習の場について課題把握場面で示してきた。本時においても、「真っすぐ回る」ためには、どこを見るのかといった視点のポイントや、いつまで手をついているのかといった腕支持のポイントを具体的に示している。Yさんは発言こそないものの、それを真剣に聞いていた。練習の場についても、課題把握で確認された練習の場②③⑤を中心に練習を行っている。

単元を通した学び方の学習がYさんに身に付き、本時の教授行為が追究のきっかけとなっていたと考えられる。

(3) 器械運動跳び箱運動における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

本時の冒頭、Yさんの台上前転は、回転の後半両足が重力にまかせて落下し、ドスンといった音で着地していた。課題把握で視線、手のつき方を教わったYさんは、追究場面でそれに気をつけて練習しており、勢い任せの回転から少しずつ回転速度を調整しているように見受けられた。練習の場の推移としては、跳び箱3段と跳び箱5段を行き来しながら追究していたが、前半の最後は急にセーフティマットへ行き、真っすぐ回るための感覚的なコツがつかめていないようにも見られた。

追究場面の途中で、友だちの試技を見た後は、他の練習の場に行くことなく、繰り返し跳び箱5段で追究を続けた。まっすぐに手をつくことを意識し、背中がつくまで手をついている時もあった。それにより着地の音がストンといった感じに変わる。回転も最初よりゆっくりとなる。ふり返りカードには、「手を横につくことを工夫した」「手をぐうっとつくことをがんばりたい」と書いている。

こうしたYさんの姿は、真っすぐ回るための動きのポイントを理解した上で、自分の課題や練習方法を明確にもって試行錯誤する姿であり、友だちの「ぎゅうっ(っと手をついている)」といった感覚を示す言葉を手がかりに、自らの感覚をつかもうとする姿であったと考えられる。



手を横にぐうっとつき、背中が付く前まで離さない。



1. 子どもの様子

(1) 準備～ドリル・サーキットの場面

班で協力して場の準備をする。教師が準備の時間が2分56秒であったことを伝えられると「イエーイ」と喜ぶ。ゆりかご（ドリル）は、立ち上がるころまではいけない。カエルの足叩き（ドリル）は、1回足を叩くのが精一杯だった。サーキットでは、②台上前転、①台上前転、⑧くま歩き、⑦カエルから跳び降り、⑥台上前転、⑤台上前転というように回った。サーキットを終えると笑顔でスキップをした。

(2) 課題把握の場面

教師の「手をしっかりついてまっすぐ回りたい人？」と尋ねられた時、手を挙げた。教師の示したお手本動画を見ていた際、教師の「(手本の人は) どこ見ている？」という発問に「脚」と答えたり、「手をどこまでつけている？」との発問に「転がるまで見ている」と反応した。また、教師の「久保田先生(横に落ちてしまう)は、なんでそうなったんだろう」と問われると「斜めになっている」とし、「どうしたらいい？」という問いかけには、「まっすぐおへそを見て」と答えた。

(3) 練習の場面

練習した場	せいかさんの様子	
② ↓	・迷うことなく③の場所から始めた。助走から踏切、着手、回転とスムーズに回った。(写真1)	
⑤ ↓	・⑤の順番待ちで並んでいる際に前にいる友だちに「私、今日、細いところで練習したいんだ」と話す。	
⑥ ↓	・手と後頭部を着いてからゆっくりと回る。	
⑤ ↓	・回転から着地にかけて左ほうこう曲がる。	
② ↓	・教師に「どこに手を着いた」と尋ねられる。(返答未確認)	
⑤ ↓	・前で跳んだ友だちが初めてできたことを知ると跳ねて喜ぶ。	
② ↓	・回転から着地にかけて左ほうこう曲がる。(写真2)	
⑤ ↓	・回転から着地にかけて左ほうこう曲がる。	
③	・踏切の勢いが足りず回転不足となり、回りきれずに潰れてしまう。	
【全体指導】 まっすぐ回するためのポイント確認「手はギュッと着く」		
③ ↓	・曲がらずにまっすぐまわる。教師に「できるようになったね。手は手前にね」と言われ、笑顔で頷く。(写真3)	
⑤ ↓	・まっすぐに安定して回ることができるようになる。	
⑤ ↓	・着地がお尻から落ちる。	
② ↓	・着地の際にドスンと大きな音とともにお尻から落ちる。	

① ↓	・回転後、足から着地する。	
⑥ ↓	・足から着地し、笑顔になる。(写真4)	
⑥ ↓	・スムーズな回転で足から着地する。	
⑤	・お尻から着地する。(写真5)	
	・教師が終わりの合図に笛を鳴らすと「ええ、もう終わり」とつぶやく。	

(4) パルクールの場面

- 1 回目 ・③→⑦→⑥→⑤の順で行う。
・台上前転を行うことはしなかった。
・最後の⑤の場では、台上前転をしようと思ったのか両手を跳び箱の手前に着いた状態で止まり曲が止まった(時間となった)。
- 2 回目 ・③→①→⑥→⑤の順で行う。
・最後の⑤では台上前転を決めてピースの決めポーズを笑顔で決まる。

(5) 振り返り(カードへの記述)

【工夫したこと】

⑤番で、ちゃんと手を着いてきれいにまっすぐ回れるようにしました。

【もっとがんばってみたいこと、たしかめてみたいこと】

③番などで、台上前転した後にマットにきれいに立つことができないので、台上前転をするときに手をもうちょっときれいについてきれいに台上前転をしたいです。

2. 考察

- ・せいかさんは、練習の場面だけでも合計 15 回の台上前転を行った。これだけ多くの練習ができたのは、時間が確保されていること、場が確保されていることによるだろう。
- ・せいかさんは、練習の途中「私、今日、細いところで練習したいんだ」との思いを友だちに話している。ここには、自身の「まっすぐ回れていない」という課題認識に照らし合わせた実態認識が確かにあり、それに応じた方法認識をみることができる。このような彼女自身の学び方の育ちの支えになっているのは、つまずきに応じた豊富な場の設定が挙げられるであろう。
- ・練習場面での全体指導で、「手はギュっと着く」ということが確認された。それ以降せいかさんは、曲がることなく回転することができるようになった。「ギュ」という内感に働きかける言葉がせいかさんのできる姿に繋がったものと思われる。彼女なりの「ギュ」という着手の仕方が形成されたものと思われる。
- ・パルクールの場面では、2 回目に台上前転を決め笑顔でピースする姿が見られた。練習の成果を発揮できる場があることは、自身の学びを進めていく上でも大切なことであると思われる。
- ・せいかさんは、途中、初めて台上前転ができた子の姿を見て、跳ねて喜んだ。このように他者の成長を喜びあえる学級集団が育っているということは学校体育において重要なことだと考える。

箕輪北小学校 中位生（A児）記録

宮田小学校 長尾 光弘

1. 子どもの様子（追究の様子や動きの様相の変化）

（1）準備～課題把握

体育館に到着後、場の準備を終え、ストレッチとサーキットに入った。ゆりかごでは、背中を丸めて転がり、その勢いで立ち上がることができていた。カエルの足打ちでは、しゃがむ姿勢から腰を高く上げ、最高で3回の足打ちができていた。この時点で、A児は友達との会話やつぶやきはなく、寡黙だった。

課題把握の場面では、まず前時の学習から腰の高さや後頭部を着くことを振り返った。次に本時のめあて「細いところを真っ直ぐ回れるようになるう！」のために必要な動きのポイントや練習の場を確認した。A児は、先生や友だちの話を聞きながら本時の学習内容を確認していたと思われる。

（2）追究（練習・パルクール）

練習では、次のように場を回って練習をしていた。

③×3 → ⑤ → ① → ② → ③×2 → ① → ④ → ③ → ② → ⑧×2 → ⑦×2 → ⑥ → ③ → ④ → ③×2 → ⑧

場	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
試技数	2	2	8	2	1	1	2	3	21

試技後、ずれたマットを必ず直していた。友だちとのかかわりはなかった。

パルクールでは、次のように場を回っていた。

場	④	③	⑤	⑥	⑧	⑦
動き	台上前転	台上前転	片手を着いて跳び箱の横を通過	片手ずつ着いて2つの跳び箱の間を通過	台上前転	ジャンプ

2回目も同様の回り方だった。1回目で失敗した⑦のジャンプを2回目で成功させ、決めポーズもできた。

（3）振り返り・授業後インタビュー・学習カードの記述

学習カードに以下の通りに記入した。

学習の記録	
日にち	今日の授業の振り返り
10月28日 月曜日	めあての達成度 0% 25% 50% 75% 100% 工夫したこと 3番目に手を置いて、へた。 もっとがんばってみたいこと、ためしてみたいこと（次の時間のめあて） 3番目に、きつ、とついてまわった。

2. 子どもの様子からの考察

(1) 本単元での教材化（手立て）の効果について子どもの様子から

本実践の中心教材であった「パルクール」は、子どもたちが意欲的に学習に取り組むことができる要素だったと思う。「パルクールの中で回転（台上前転）がしたい」そんな思いがあったのではないだろうか。子どもたちにとって、台上前転の学習は自分が気持ちよくパルクールをするために必要感があったように思う。

(2) ゴールイメージに迫るための単元展開及び教授行為について子どもの様子から

毎時間、パルクールの練習を位置付けていることで、自分だけのパルクールの出来栄を実感することができ、次時への意欲につながっていたと思う。

導入で台上前転の模範動画を視聴し、動きのコツを確認し合った。中盤で、台上前転が上手な子どもに試技をさせた。まわりの子どもたちに動きのポイントをおさえられたり、試技をした子どもの自信につながれたり、子ども間の関係の向上にもつながられたりする効果があったのではないだろうか。

(3) 器械運動の跳び箱運動における運動の楽しみ方を創り出している具体の姿

A児は、口数の少ない児童ではあったが、試技数は21回もあり、運動量はかなりあった。特に③の場での試技回数が他の場に比べても多かった。ただ、③の場だけでなく、他の場も1回以上の試技があった。それぞれの場を楽しんでいるようにも思えたが、どの場でも台上前転の動きができるのか試しているようにも思えた。それぞれの場の目的は、教師から提示されてはいるが、それを応用し、自分なりに場の使い方を工夫していたのではないだろうか。そういった面でも、8つの場があったことは、子どもたちの学習の幅を広げるものになっていたのではないだろうか。

小学校 授業研究会 記録

<授業者反省>

大鷹先生 子どもたちは緊張していた。いつもより静かだったが楽しくやる姿が見られた。めあてをつかませるところ、「まっすぐ回るにはどうしたら」いいかをしっかりつかませたかった。ギューの言葉が印象的。子どもたちの擬音語や感覚をもとにした学習も大切だと思った。

水明小 両角 質問。場が工夫されていたが、先生が考案したか、研究会で作られたか。

村澤 今回の場は、夏合宿の際の下位教材づくりで、先生方に作っていただいた。どの場で使うかは大鷹先生の方で選択していただいた。

<1 本単元での教材化(場)の効果について>

赤穂東 唐澤 台上前転だけでも豊富な場が用意されていた。みゆさん⑥が18回、②が4回のトライアルがあった。彼女が変わったのは⑥の場面でだんだんとスムーズになった。なぜかは台上のフワッとした感覚を自分でつかんだと思う。ギューという言葉も彼女の中ではしっくりきたと思う。後半も⑥に没頭していた。彼女の学習カードにもギューという言葉が現れ、やりたいこととリンクした時間になった。彼女の感覚に友だちや教師からのフィードバックがあるといいと思った。

西箕輪中 宮原 同じくみゆさん。前時よりも安定感が出てきていた。今後はロイター板を蹴って腰をあげる、一步手前(下の段階)のセーフティーマットを使用した場で練習してもいいと思った。みゆさんの周りの子の補助やアドバイスがあるともっともっと良くなると思う。

村澤 背中からどんと落ちるような回転だったが、傾斜のついた場が彼女に合っていた。惜しいのは高いところから回転しているので場が上手く使い切れてないのかもしれない。場の使い方と、場を外側から見る手だてがあってもいいと思った。

伊那小 有賀 せいかさん。前時から成長していた。場もよかったが、先生のかかわり方もよい。どこから手が出ている?どこまで手をついているなど、発問スタイルの声かけがとてもよかった。まっすぐ回るために、広いところではなく、自分で細いところを選んでいる姿が、見られ、すごい姿だったと思う。

着地のところ、ギューってということば、体の芯が緊張しているところなども、子どもの言葉で抑えていけるといいと思う。

<②も含めて>

伊那養護 伊藤 教授行為にかかわって、まっすぐ腕をつく、動画を2本比較する中で、詳しいところまで外的ポイントを押さえていた。ギューという言葉を引き出したところも良かった。ゆうすけさんは、なから台上前転はできていたが、ギューというポイントをつかんだあと、跳び箱をしっかりつ

かんで、ゆっくり滑らかに回る姿、成長が見られた。「手をグーとして」と学習カードに書かれていたように、教師や友だちからの言葉を自分の中で消化して、自分のものになっている姿があった。

中沢小 平沢 ななさん。最初回れなかった。②のところで、最初回れなかったが、まわれるようになって、友だちと喜び合う姿が見られた。友だちと相談して②から⑥へ移動したが。やはり合わないに戻る姿があった、豊富な場があったことで、場の選択ができ、試行錯誤しながら学習する姿がみられた。お手本の子の2回の試技も彼女にとってはありがたかったと思う。

西箕輪中 垣内 台上前転への出合わせ方が素晴らしい。パルクールのお手本動画を見せた時の「楽しそう」の声が印象的。怖いものではないという出合わせ方が素晴らしい。あけみさんは様々な場を移動していたが、⑦番のステージにのるところ、「頭吹っ飛んでたよ」と言われていたが、今練習していることが自分の課題に繋がっているのが自覚できるといいと思った。ひなたさん、回れるけど足が伸びてしまっていた。段差があるところだと着地ができた、いろんな場があることで、ひなたさんにもよかった。安全面で準備片付けの速さはよかったが、跳び箱を持って走るところやマットを直すところ、パルクールの導線的なところなども確認できるいいと思った。

村澤 安全面については、逆走をしないこと、マットを直すところ、8人でやる人数のことなど、確認してきた。今回は子どもたちが没頭するところに重きをおいた。

箕輪北小 久保田 ゆいさん。初めの方の授業でけがをして、前時から参加。細いところをまっすぐ回るというよりも、手をしっかりつきたいところに意識がいていた。前時までのところの課題、自分ができていないところを、後追いのような形で、子どもの意識に沿って学んでいる姿が見られた。最後、ふりかえりのところでも、「頭をしっかりつきたい」という記述が見られた。

水明小 両角 ひなたさん。④番の場を選ぶ姿がみられた。自ら運動の楽しさを作り出す姿かは疑問だが、一生懸命取り組む姿が見られた。音楽がなってからはスピード感に乗って、すぐに起きて動く姿が見られた。着地のところまでピシッと止まる姿もあってもよかったかもしれない。ひなたさん、自分の課題が十分意識されていないところもあったかもしれない。課題を振り返らせる手立てがあってもよかったかもしれない。勢いでいってしまうところもある。動機づくりとしてはいいと思うので整理していけるといい。

西箕輪小 赤澤 運動量が多くてよかった。手をグーとする子がいたが、他にも着目する感覚のつかさね、手以外のところに着目した子がいたら教えてほしい

大鷹 おへそを見た。ちっちゃく回ってみた。次やることを考えさせるのはまだ難しい。次の自分の課題の見つけ方が課題か。

赤徳南小 江口 大輔くん。着地できないところにこだわっていた。手でグーと意識したことで、回転を調整することにつながってきたかもしれない。先生からも褒められて、自信をつけていった。1

回だけ⑧に挑戦した。最終的に学習カードに「⑧番でロイター板をしっかり使って回りたいと書いていた。次の課題がしっかりもてていた。

村澤 ギューという言葉を手掛かりにして、僕は私へと、自分の感覚と向き合う姿が見られて良かったと思う。どういう風に学びの蓄積ができるか研究部会でも考えていきたい。